（第3種郵便物認可）

読売俳壇

矢島渚男 選

逢ひに行く君のふる里道をしへ　尾鷲市　中村　東太

【評】求婚か出産があるのか、分からないが恋人を実家へ訪ねてゆくところ。道教えがこちらですよ、と先導してくれるよう。清らかな豊かな抒情を混えた懐かしい句である。

立ち止まり老いてゆく日々芒種なり　横浜市　鈴木　基之

【評】芒種は陰暦の四月末～五月上旬と幅がある。ノギを持つ麦や米の種を蒔く季節で、その中に来し方を思い出しては時々立ち止まりつつ散歩する老人があった。この老人は自分を客観視出来る作者。

ながれ行く時をゆたかに麦の秋　旭市　工藤　豊

【評】単純に率直に季節を讃えている。こうありたいもの。

かきつばたここが娘のふるさとに　東京都　青木　公正

傘雨忌や豆腐一揺れするを待つ　四街道市　須崎　輝男

うれしげな洗濯物の五月かな　宇都宮市　津布久　勇

髪洗ふ残業代のなき職場　霧島市　秋野　三歩

窓の開く電車久しき谷若葉　佐野市　村野　則高

特別な時代の一つ昭和の日　玉野市　北村　和枝

奥入瀬の空見当たらず新樹光　草津市　小川　昭一

高野ムツオ 選

来し方や母の日ならぬ日はあらず　調布市　長沢　寸拙

【評】母の日は日本では五月の第二日曜。しかし、三百六十五日、母の日でない日はないと異を唱える。自分が生まれてこの方、すべての日が母の日だとの主張が快い。

蒲公英を吹いて野原の子となりぬ　福岡県　高瀬　忠

【評】蒲公英の絮を遠くに飛ばすのは本来は風の役目。代わりを務めた、その瞬間から野原の種々に仕える風の精となる。

さうぶ湯や生疵絶えぬ日日ありぬ　東京都　杉中　元敏

【評】菖蒲湯に浸かり、幼かった日日を回想している。膝、肘、あるいは額の傷。湯の中で父が菖蒲の効能を教えてくれたのかもしれない。

母の日や海は見えねど潮の香　川崎市　西　順子

釜底のデブリ千トンいぼがへる　福島市　木村　隆茂

父の忌の客の帰りし桐の花　相模原市　はやし　央

藤の香や綿菓子売りの強面　旭市　神成田佳子

新緑のうへを滑走モノレール　倉敷市　中路　修平

踏絵見しあとに見上ぐる空広し　熊谷市　小林　幸子

滝音を神とたたへて田植かな　津市　中山　道春

正木ゆう子 選

副作用まつ毛に至り五月来る　高砂市　黒田　令子

【評】薬の副作用で睫毛が抜け始めた。その前に髪も抜けたかもしれないが、それを言わず、淡々と言葉を紡いだ力強い句。「五月来る」の明るさが、作者を後押ししている。

採血に慣れて看護師夏来たる　匝瑳市　椎名　貴寿

【評】採血の上手な看護師さんとの出会いは僥倖である。しかし誰もが最初は新米だった。看護師さんが採血に慣れると、患者も嬉しい。

初夏やビタミン色のカーディガン　東京都　石田　絹子

【評】ビタミン色とは、レモン・オレンジ・ライム等ビタミンC豊富な柑橘の色をいうが、明るく気分の上がる色なら何でもそう呼びたい。

おおとだけ言うて筍飯を食ふ　柏市　佐藤　敏文

母の分までやさしき母の日の父よ　神戸市　吉野　勝子

春愁は古鏡が吸い取ってくれる　甲府市　村田　一広

バスを待つ人の影濃し小判草　姫路市　田辺富士雄

巣鳥の折りつつ選ぶ枝散乱　松戸市　稲葉　豊美

軽やかに見えぬて風に散らぬ罌粟　久喜市　深沢ふさ江

居酒屋の隣に海鞘の好きな客　川越市　大野有之介

小澤　實 選

猫が顔踏んでゆくなり昼寝覚　京田辺市　加藤　草児

【評】昼寝から覚めて、ぼんやりとしていると、飼い猫がわが顔を踏んでいったというのだ。飼い主よりも自分の方が偉いと思っているのか。それとも通り道だったのか。

ぴゃあと潮吹くわんぱくな浅蜊かな　東京都　渡辺　貴子

【評】まことに生きのいいあさりである。「わんぱくな」の擬人化は問題になるところだが、「ぴゃあと潮吹く」と響き合っていいと思う。

かたつむりぐーんと伸びて殻傾く　東京都　天地わたる

【評】かたつむりが全身をよく伸ばしきり、殻が傾いている。このかたつむりも元気がいい。雨が降り出しそうな空が広がっているのだろう。

塩パンの塩つぶ光る立夏かな　横浜市　岡　一夏

浮上せる海女のまたすぐ潜りけり　伊勢市　藤田ゆきまち

少年の片手倒立大夕焼　香取市　嶋田　武夫

初夏や樹下に広ごるヨガマット　大阪市　貝田ひでを

麦秋の野を真っ直ぐに川光る　日立市　菊池　風峰

新じゃがを潰すポニテを揺らしつつ　西東京市　永井　康信

俺が持つと譲らぬ二人ところてん　大津市　星野　暁

枝折（しおり）

前田霧人著『新歳時記通信』「歳時記篇」「俳論篇」の2分冊の大著。俳人にして地球物理学者の著者が、2008年から24年に手がけた不定期刊の個人誌をまとめた。前者は時候や天文、地理に関わる部分を「暦と天地」「気象」の2部19章に再編して解説。後者は「ホトトギス論」「歳時記雑話」など5部構成で俳論35編を並べる。

（コールサック社、「歳時記篇」8800円、「俳論篇」2530円）

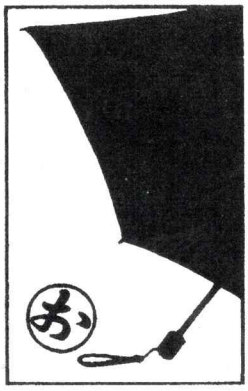
高浜虚子『俳句読本』　底本の角川文庫版を新字新仮名遣いに。

（河出書房新社、3080円）

小林理央著『金魚すくいのように』　5歳から短歌を始めた歌人の2冊目の歌集。高校入学時から社会人2年目までの歌を収めた。若い人ならではのやるせなさがみずみずしい。

＜パンプスの形に日焼けの跡がつく向いていないか営業の日々＞

（KADOKAWA、1980円）



題字デザイン・イラスト　福田美蘭